慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Plautusにおける感嘆及び疑問のut+直接法又は接續法の使用について
Sub Title	Exclamation and the interrogative from of "ut" and indicutive or subjunctive mood in Plautus
Author	藤井, 昇(Fujii, Noboru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.143(20)- 162(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Plautus における感嘆及び疑問の ut＋直説法 又は 接續法の使用について

藤　井　　昇

古典期のラテン文法では，たとへば，

videtisne, ut apud Homerum saepissime Nestor de virtutibus suis *praedicet*? (Cic. *Sen.* X. 31)

（ホメーロスの書の中で，非常に屢々自分の勳功についてネストールが，いかに大言壯語の演說をするかを君たちは知つてゐるか？[1]）

rogat me quid *sentiam*. (Allen 573)

（彼はわたしがどう考へてゐるかをわたしに訊ねる）

や，

quam *sis* audax omnes intellegere potuerunt. (Cic. *Rosc. Am.* 87, Allen 573)

（どれ程君が勇敢であるか，皆が理解することができた）

の例にみるやうに，從屬節に置かれた疑問・感嘆は，その動詞を接續法に置くのが普通である。このことは，接續法といふものが，「想」idea を表す法である[2]ことからも容易に首肯できることであつて，直說法がどこまでも「事實」fact の法である[3]，といふ古典文法の見地からみれば，ラテン語の直系ともいふべき現代イタリア語の

Vorrei sapere chi *ha fatto* tal cosa.

（そんなことを誰がしたか知りたい）

における直說法の使用は寧ろ奇異であらう。イタリア語にあつては，間接疑問における動詞の法は，直說法もしくは接續法を用ひる[4]とされ，

Non so con chi *sia uscito*.

（誰と彼が出かけたかわたしは知らない）

Non posso immaginare chi vi *abbia dato* questa notizia.

（このしらせを誰が貴方に知らせたか想像もつかない）

などから推察される[5]やうに，直説法か接續法かの撰擇は，ちやうど英文法にあつて，

I remember what he said.
I don't remember what he said.

の二文中の what が，關係代名詞か疑問代名詞かを決定するに似た微妙さがあるやうである。わたしはつねづね，言語表現の差異とは，表現される事柄の差異ではなく，その事柄に對する話者の心的態度の差異のあらはれであることを强調してゐる者であるが，ひるがへつて，上記の

rogat me quid sentiam.

について考へてみるに，quid sentiam の內容をなしてゐる mea sententia なるものは，この場合，「事實」的には既に決定されてゐるものなのである。この文の話者は「私」であり，その「私」が何を考へてゐるかは當然「私」といふ話者にとつては既知の事柄であるが，しかし，そのことは，「想」の話法としての接續法の使用を聊かも妨げない。なぜなら，ここにおいては，主動詞 rogat に意識の中心が移されてをり，そこから觀ずれば，從屬節は當然「想」の領域となるからである。

きはめて大づかみに言へば，接續法の意味はただ「想」に盡きるともいへるのであつて，泉井久之助教授がその「ラテン廣文典」§373 において，*cum*＋接續法過去，を說明される序，次のやうに述べてをられるのは傾聽に價しよう。

「直說法は一つの過程を確實な事實として，われわれが確信をもつて直敍する動詞表現の樣式である。これによつて表現される內容は，いつも表現意識の焦點に結ばれ，前景にあらわれている。cum によつて連ねられる主文も副文も，その動詞が直說法であるとき，二つともに現實のものとして，前景にあらわれてあざやかである。

しかしわれわれがその中の主な一つの事件だけに注意の中心を向けて，ここに表現意識の焦點が結ばれるとき，副次的な事件は焦點をはずれて，遠景的に霞んでくる。それは現實に注視されたものというよりは，感ぜられたもの，思われたもの，になつてくる。主觀の影が漂うてくる。

古典期のラテン人はこのような心理の微差にも敏感であつて，この焦點にはずれた遠景，後景を接續法であらわした。つまり表現に前景と後景ができて，表現に奧行きがはつきりすることになる」(p. 215)（原文のまま）

そしてこのことは，いふまでもなく，間接疑問・感嘆を示す従屬節における接續法にも原則的には適用できることである。また，characteristic clause と言はれるものにおける接續法の使用も，ほぼ同じ心理的觀點から説明され得ると思ふ。

ところで，泉井教授の所謂「副次的な事件」といふものは，心理的に可成高度の段階を示すものであらう。

Antigonus, cum adversus Seleucum dimicaret, in proelio occisus est.

(Izui, *ibid.* §374)

（アンティゴヌスは，セレウコスに對して（と）戰つたとき，戰鬪において殺された[6]）

この文章において，若し心理的に直接な段階を考へるならば，それは「アンティゴヌスが殺された」といふことの傳達だけにとどまることは言を俟たない。ちやうど，われわれの日本語で，

「あのね，誰々さんがね，怪我したのよ」

と息せききつて急を告げる子供の言語などに見るごとく，言語表現の單純な段階にあつては，「副次的な事件」は，よし心中にはあつても，現實の發言には，省略されるのが常である。そしてこのことは，cum＋接續法過去，の場合のみでなく，一般に從屬節の場合にも言ひ得ることであらう。すなはち，「副次的な事件」とは「事件」が二つ以上あつて，その中の一つが先づ「主たる事件」として感知せられてのちに，その時その時の價値基準に依る重要度の測定が心中に行はれた結果，從たる位置に置かれる所の事件である。だから，從屬節を導く接續詞は，必然的に，本來他の品詞より派生したものであつた。英語の before, after 等が本來副詞であつたこと，現代イスパニア語の，

Antes de quince días se compondrá el reloj.

（二週間以内に時計は直りませう）

Antes de que te cases, mira lo que haces.

（結婚する前に汝のなす所をよくみよ）

における antes de (lit.＝'before of') の前置詞的用法と antes de que (lit.＝'before of that') の接續詞的用法が共に副詞 antes に基づくこと，はその好例である。ラテン語においても，ne, ut, si, num などは本來副詞であつた。英語 not に似て，ラテン語の否定詞 non は nec unum (i. e. not one) を意味する noenum から出たものであつて，本來の否定詞は，今日普通接續詞的に用ひられ

る ne であつたことは，ne……quidem などにその用法の名残をとゞめてゐるとこからもうかゞはれる。ut は後に述べるやうに，元來 'how' の意であつたし，si (古 sei) も，ip-se の -se にのこる so- の loc. sg. から來る pronominal adv. で，'so' (英語) の義から生じた接續詞である[7]，num も 'now' (Gr. νῦν <Idg. num) に出づる[8]。licet などは，その動詞起源が歴然たるものであるし，今日，意味の度合が最もうすいと感じられる接續詞であるフランス語 que (伊 che, 西, 葡 que) にしても，本來 'because' や 'as respects that' を意味した quod が，のちに Gr. ὅτι と同じ用法を示すに至つた所に起因することは周知のことであり，その 'because' の意の quod 自體，關係代名詞の neut. sg. acc. に語源を引いてゐる。

Plautus の言語が，人間の言語活動 langage としての初期の段階を示してゐる，とは，わたしは言はない。Plautus の古さは，古典期ラテン語の樣相と比較してみた場合の，時代的な古さであつて，その言語表現の技術としては，可成文學的洗練を經てゐるものであらう。たしかに Plautus の觀客は，Terentius のそれに比べれば，教養の度は低かつたかもしれないが，頻繁な alliteration の使用，時にあらはれるギリシァ語，それに何よりも笑ひの內容などから見ても，Plautus の文學は決して粗野・生硬なものではなかつた。けれども同時にそこに，おびたゞしい colloquialism を見ることができる，といふことも亦忘れてはならないであらう。凡そ古い時代の言語の會話的表現の實相がどのやうなものであつたかを知ることは，殆ど困難と言つてもよいのであるが，大體において，わたしたちは Palmer に從つて[9]，(1) 間投詞 (2) 感嘆の acc. (3) 殆ど間投詞と化した祈願・呪詛の文句 (4) 同語反復 (5) prostactic 'tu' (6) 人稱・指示代名詞 (7) 二重比較級 (8) 二重否定 (9) 冗語法 pleonasm (10) 英 'very' に當る種々の强意語 (11) 單純な動詞の代りに用ひられる prefix のついた强意・反復動詞 (12) 縮小辭，の頻出や，その他語彙一般にあらはれた傾向から，まづ，Plautus には，當時の colloquialism が可成濃く反映されてゐると見てよいであらう。そしてこのやうに見た場合，たとへ相當高度の文學表現ではあつても，本來可成の速度を以てやりとりされ，その間いちいち思考の中で「主・副次」の關係を冷靜に整理して發表するいとまにめぐまれない「會話」といふ形式が，從屬節における疑問や感嘆の表現に迫られた場合，その構造に古典期の文法の枠外に出る形を示してくるの

は，むしろ當然である。

古典期ラテン語において，ut＋接續法，の形で副文章を形づくる ut も亦上のやうな事情を物語るものであつた。古典期ラテンでも，わたしたちは，たとへば，

velim facias. (=fac. 'I wish you would do; Please do it.')

の如き形を非常にしばしば見るのであるが[10]，これはあきらかに，potential subjunctive としての velim と jussive subjunctive の facias との竝置から生じたものである[11]。次に

fac cupidus mei videndi sis. (Cic. *Fam.* V, xxi, 5)

(私に會ふ氣になるやうにせよ)

も，可成くだけたスタイルであらうが，これも構造上は竝置に因を持つものであらう。licet が 'though' の意に用ひられ，接續法を取ることにしても，これに當る「よし……あれ」の日本語からも推察される如く，「よし」licet と「あれ」(juss. subj.) の竝置である。上の fac の場合，日本語の「やうに……せよ」に當る fac ut の形となり，

facito ut sciam. (Cic. *Att.* II, iv, 4)

(わたしが知るやうにしてくれ)

のやうな表現をみるやうになつたことは，ここに「主副の關係」を生じたことを示すものであるが，接辭 ut「やうに」は

facite, fingite, invenite, efficite, quî detur tibi. (Ter. *And.* II, i, 34)

(何とか智慧をしぼり手段を講じて，君のものになるやうにしろ)

の傍證によつても判るやうに，quî に近い意を持つた副詞であつた。このことは，全時代を通じて，主文章において，感嘆の副詞としての ut が用ひられることからも論をまたない。すなはち，

ut dissimulat malus! (Plaut. *Merc.* 974)

(惡黨め何てとぼけてやがる)

ut multa verba feci; ut lenta materies fuit! (*Mil.* 1203)

(いやはやおれもえらく喋りまくつたもんだ，あいつ强情な性質だつたらありやしない)

ut melius quidquid erit pati! (Hor. *Carm.* I. xi, 3)

(何事が起らうと耐へることがどれほどましなことか)

などで，Plautus からわたしが拾つた例は

Amph. 1062, 1103

Asin. 581, 584, 616, 629, 705, 773, 892

Aul. 52, 93, 503

Bacch. 205, 579, 642, 795, 876, 898, 1024, 1173, 1199

Capt. 165, 276, 419, 579, 649, 902

Casin. 432, 463, 467, 558, 596, 851

Cist. 537

Curc. 100

Epid. 13, 56, 222, 342

Men. 168, 491, 571, 572, 641, 758, 833

Merc. 661, 904, 974

Mil. 466, 467, 757, 763, 1142, 1203, 1227, 1236, 1253, 1266, 1272

Most. 271, 279, 796

Pers. 91, 464, 476, 547, 623

Poen. 325, 654, 969, 1109, 1193, 1198, 1221, 1222, 1223, 1294

Pseud. 911, 946, 1309

Rud. 154, 164, 175, 245, 247, 363, 408, 421, 441, 459, 461, 531, 901, 1064, 1175

であり，これらは極く普通の用法で，列擧に値しないほどであるが，このうち，

ut quidem hercle in medium ego hodie pessume processerim. (*Capt.* 649)

(何とまァこの俺ァ今日惡運のまつ只中に足をふみ入れてしまつたこつた)

は注目に値しよう。すなはち，ここでは processerim といふ接續法が主動詞に用ひられ，いはば「ふみ入れてしまつたとは」ともいふべき表現になつて，「とは」につづくべき表現されない部分が，ut 以下を副次化する主文章の可能性を志向してゐると思へるからである。

このやうな主文章に於ける ut は，上述の如く感嘆の副詞としては古典期にも普通であるが，疑問の副詞としては古典期に稀である。すなはち，

ut sese in Samnio res habent? (Liv. X, xviii, 11)

(サムニゥムでは事態はどんな風であるか？)

の如き散文にはすくなく，詩では，

us valet? ut meminit nostri? (Hor. *Ep.* I, iii. 12)

（彼の機嫌はどうです？　どれ程私の事を覺えてゐますか？）[13]

ut Nasidieni iuvit te cena beati? (Hor. *Sat.* II, viii. 1)

（果報者のナースィディエーヌスの晩飯はどうだつた，お氣に召したかね？）

があるが，Cicero にはその例を見ないとされる。Plautus では，

quid? ea ut videtur mulier? non, edepol, mala. ut moratast? nullam vidi melius mea sententia. (*Merc.* 391—2)

（「なに？　で，その女何う思ふ？」「そりやアたしかに……惡かありません」「氣立は何うだ？」「わたしのみるところではあれより好い娘は見たことがないです」）

salve! mi sodalis Eutyche, ut valuisti? quid parentes mei? (ib. 947—8)

（今日は，エッテュケー君，どうだつた，元氣？　ぼくの兩親はどう？）

quid agitur, Sagaristio? ut valetur? (*Pers.* 309)[14]

（どうだね，サガリスティオー，ごきげん如何？）

ut vales? non male. (*Most.* 718)

（「ごきげんいかゞ？」「まづまづだ」）

et ut surrupta fueris? (*Pers.* 380)

（「そいで，どんな風にお前さん連れていかれちまつたのかい？」）

など。[15] ut vales? の形は *Epid.* 9, *Pers.* 17, *Rud.* 1304 にも見える。

さて，以上のやうな感嘆・疑問の ut に導かれる部分が，從屬節を形成する時，その節の動詞は既述の如く，接續法に置かれるのが古典期文法の通則であるが，Plautus では事情はそのやうに簡單ではない。從屬節は時に直說法を，時に接續法を取つてゐる。これは過渡的な現象であらう。しかしそこになにか手がかりは得られないであらうか。

Gildersleeve は既に，主動詞が命令法に置かれてゐる場合，ut に導かれる從屬節中に直說法の動詞があらはれることを指摘してゐる。[16] これを更に整理してみると

(1) hoc 等の語句により，ut 以下が豫め提示されてゐるもの

hoc sis vide, ut *petivit* suspiritum alte. (*Cist.* 55—6)

(あれをまァごらんよ，何て深く吐息をついたことか)

hoc vide ut *ingurgitat* impura in se merum avariter, faucibus plenis. (*Curc.* 128)

(あれをみろ，げす女め，何て貪慾に，咽喉をふくらせて酒を流し込んでゐることか)

hoc vide ut *dormiunt* pessuli pessumi nec mea gratia *commovent* se ocius. (*ib.* 153—4)

(あれをみろ，内のやつ眠つてゐて，有難いことに動き出すまいて)

hoc sis vide, ut *palpatur*. (*Merc.* 169)

(あれをごらんなさいませ，何て可愛がつてゐることか)

hoc sis vide, ut alias res *agunt*. (*Pseud* 152)

(これをいいか見な，連中が他の事をやらうとしてるざまを)

illuc sis vide, ut *incedit*. (*Aul.* 17 47)

(あれを見てみろ，何て歩きざまだ！)

quin tu *illam* aspice ut placide *accubat*. (*Most.* 811)

(さあ，旦那彼女(ァレ)をごらんなされ，何て安らかに横になつてゐなさることか)

postremo ut *voles* nos esse, syngraphum facito adferas. (*Asin.* 238)

(早くいへば，あたしたちにどうあつてほしいのか，一札持つてきてください な)

以上は上述の如く，本來は竝置にもとづくものである。すなはち，

hoc sis vide, ut petivit suspiritum alte.

は，獨立した，

hoc sis vide.

と

ut petivit suspiritum alte.

との二文に分けられるものである。

(2) ut 以下を豫めうける語句を持たないもの

ut viridis *exoritur* colos ex temporibus atque fronte, ut oculi *scintillant* vide. (*Men.* 830)

（こめかみや額から何てみどりの色が發してゐることか，何て眼がかゞやいてゐることか，ごらんなさいましな）

vide ut *fastidit* simia. (*Most.* 886)

（見ろ，猿め，何て嫌がつてゐるか）

最初の例における vide の後置は，やはり ut の節の獨立性が高いことを物語つてゐる。

vide ut に準ずる表現としては，

edoce eum[18] uti res se *habet*. (*Trin.* 729)

（あいつに事がどうなつてんのかよおく教へてやれ）

eloquere ut haec res *optigit* de filia. (*Rud.* 1211)

（かうしたことがどうして娘に起つたか言うてみよ）

nunc tu abi ad forum ad erum et *narra* haec ut nos *acturi sumus*. (*Asin.* 367)

（さあ，お前はフォルムの旦那ンとこへ行つて，おれたちがこいつをどんな風にやるつもりでゐるかを喋つてこい）

がある。最後の例は，ut 以下が，これから自分たちのしようとしてゐることに，自分ながら期待を持つてゐるところから，さきの泉井教授の「焦點」の考へ方に立てば，直說法の使用はむしろ當然であらう。次に疑問詞が ut 以外の場合の例としては，

tandem ista aufer ac dic *quid fers*. (*Capt.* 965)

（さあ，もうあんたのそのお喋りはやめて，何のご用か仰言つて下さい）

vide sis *quam mox* vapulare *vis*, nisi actutum hinc abis. (*Amph.* 360)

（すぐに此處から歸らないとすると，どれほどなぐられたくてたまらないのか，よく考へてみる）

凡そ命令法は獨立性がつよく，同樣の例は古典期の詩にも之を見ることができる。[19]

adspicite, innuptae secum ut meditata *requirunt*. (Cat. lxii, 12)

（思ひみよ，いかに未通女らの，まねびしことを知らむと心に希へるかを）

aspice, venturo *laetantur* ut omnia saeclo. (Verg. *E.* IV, 52)

（みよ，來らむ世をいかになべてのものゝよろこべるかを）

これに對して，命令法につづく ut＋接續法の例は，Plautus には，

proinde aliis ut *credat* vide. (Capt. 292)

（してみるとほかの連中にはどれほど信をおいてゐるかが判りませうて）

と他に一例を見るのみである。けれどもこの例はじつは反語的に用ひられてゐる例であつて，「信をおいてゐない」といふのがこの場合事實として話者の意識裡にあるため，接續法を取ると考へられる。尙，後述（p.17）*Most.* 172參看。

從屬節中の ut＋直說法 の例を更に求めるならば，主文が疑問に立つ一聯の用例がある。

（I） viden ut

(1) viden ut *expalluit*? (*Curc.* 311)

（見ないか，何てまつさをンなつたか）

(2) viden ut te scelestus *captat*? (*Men.* 646)

（ごらんなさい，惡黨めどれほど貴方をつかまへようとしてゐるか）

(3) viden tu ignavum, ut sese *infert*? (*Mil.* 1045)

（ごらんよ，この馬鹿の歩きぶりを[20]）

(4) viden me ut *rapior*? (*Rud.* 869)

（ごらんですかい私を，どんな風にむりやり連れていかれてるか）

(5) viden ut tuis dictis *pareo*? (*Pers.* 812)

（ごらんでせう，あなたのお言ひつけにいかにぼくが從つてゐるか）

(6) at scelesta viden ut ne id quidem, me dignum esse *existumat*/quem adeat, quem conloquatur quoique irato supplicet? (*Asin.* 149—50)

（だが判るかね，あの惡女（ワル）めが，このあたしが近づいていつて言葉を交はして怒つてゐりや膝を折つてたのむだけの値のある人間だとさへ考へてゐやがらねえのが？）

(7) viden ut aegre *patitur* gnatum esse corruptum tuom,/ suom sodalem, ut ipsus sese *cruciat* aegritudine? (*Bacch.* 492—3)

（旦那はあの人が自分の友である坊ちやまが墮落なすつたのを如何に苦しんでいらつしやるか，お判りでせう？　いかにわれとわが身に苦しんでいらつしやるかが）

(8) viden ut *aperiuntur* aedes festivissumae? (*Curc.* 93)

（見ないか，お樂しみの家が開いてゐるさまを）

(9) viden ut anus tremula medicinam *facit*? (*ib.* 160)

(見ないか，よぼよぼババアが醫者をやつてゐる樣子を)

(10) viden ut misere *moliuntur*? (*ib.* 188)

(見ないか，可哀さうにどれほどやつさもつさ（戀のために）してるか)

(11) viden limulis, obsecro, ut *intuentur*? (*Bacch.* 1130)

(ねエごらんなさいな，いくらかやぶにらみをしてるぢやありませんか)

Cf. (1') viden tu hunc, quam inimico voltu *intuetur*? (*Capt.* 557)

(ごらんでせう旦那，この男を。何てけんのある顏でこつちを見てゐるか)

(2') videtin viginti minae quid *pollent* quidve *possunt*? (*Asin.* 636)

(お前たちいいかね，20ミーナといふものがどれだけの力があるか，いやさどれほどのことができるか)

(Ⅱ) non(ne) vides ut

(1) nonne ex advorso vides,/ nubis atra imberque ut *instat*? aspice ad sinistram,/ caelum ut *est* splendore plenum atque ut dei istuc vorti *iubent*? (*Merc.* 878—80)

(君は見ないのか，反對側に黑い雲とあらしが近づきつつある樣を，見たまへ，左のはうは空が何と輝きわたり，いかに神々が其方へ向きを變へるやう命じたまうてゐることか)

(2) non tu vides hunc, voltu uti tristi *est* senex? (*Most.* 811)

(旦那彼(アレ)をごらんになりませんか，老人何て悲しげな顏をしてゐることか)

Cf. nonne vides croceos ut Tmolus odores/ India *mittit* ebur etc. (Verg. *G.* I, 56—7)

(見ずや，如何にトモルスの山はかぐはしきクロカスを，インドは象牙を送れるか……)

(Ⅲ) audin ut

(1) audine hunc opera ut largus *est* nocturna? (*Asin.* 598)

(きいたかこいつの言ふことを——何て夜の仕事にァ氣前がいいか)

(2) audin tu ut deliramenta *loquitur*? (*Men.* 920)

(あなたはあれが何てとりとめもないことを喋つてゐるかお聞きですか)

Cf. (1') heus, audin quid *ait*? (*Capt.* 592)

(こりァ驚いた，奴が何て言つてるかお聞きですか)

(2') audin quae *loquitur*? (*Bacch.* 861)

(奴が何を言つてるか聞いたか)[21]

Cf. (IV') scin quo modo

illuc sis vide/ ut *incedit*. at scin quo modo tibi res se *habet*? (*Aul.* 46—7)

(あれを見てみろ，何て歩きざまだ[22]，それにしても手前何うなるか判つてンのか)

上の諸例のうち，(Ⅱ)(2)，(Ⅲ)(1)，(Ⅰ)(1') は，すべて hunc なる目的語を主文の動詞が取つて，このゆゑに主文の獨立性が高くなつてゐる。また，上記の疑問文を一見して氣がつくことは，これらの疑問が所謂 rhetorical question と言はれるものであつて，本質的には疑問文ではないことである。viden ut の形は十一例の多きを數へるが，これらは殆ど vide といふ命令と內容的には變らぬものである。かうした「見るや」といふ，殆ど感嘆の語にも近い viden が ut＋直說法と共に用ひられることは，じつは古典期にも見られるのであつて，正則の ut＋接續法

viden ut alta *stet* nive candidum Soracte (Hor. *Carm.* I, ix, 1)

(見るや，如何に深雪も白くソラクテの山そびゆるかを)

と並行して，

viden ut faces splendidas *quatiunt* comas? (Cat. lxi, 77)

(見るや，いかに松明はそのかがやく（炎の）髮をふるはすかを)

viden ut perniciter *exiluere*? (id. lxii, 8)

(見るや，いかに（星々の）速くのぼりいでたりしかを)

を Catullus に見ることができる。

從つて，これらの疑問文は上述の如く，命令文，更には平敍文とも同一視され得るのであらう。次に，

scis tu ut confringi vas cito Samium *solet*. (*Bacch.* 202)

(あんたァサモスの器が何てすぐこはれやすいものかご存じでせうが)

では，從屬節中の動詞が solet であつて，意味的にも直說法の使用を促す。しかし，主文の動詞が nescio では，

nec quid *agam* meis rebus scio,/nec meam ut uxorem *aspiciam* contra oculis. (*Cas.* 938—9)

(そして，こいつをどうしたものやら，わしの妻に面と向つてどう顔をみたらよいやら，判らぬ)

stulti hau scimus, frustra ut *simus*, quom quid cupienter dari/petimus nobis, quasi quid in rem sit possimus noscere. (*Pseud.* 683—4)

(まるで何が役に立つのか知ることができでもするやうに夢中になつて自分にものを欲しがるのが何と益もないことか，俺たちア阿呆でまづ氣がつかぬ)

ne plora, nescis ut res *sit*, Phoenicium. (*ibid.* 1038)

(泣くでない，ポエニキウム，お前は事がどうなつてゐるのか知らないのだ)

に見るやうに，接續法が用ひられる。このやうに，主文が形式上平敍文である場合の ut＋直說法 の例を拾つてみると，

(1) dico ut *usust* fieri.——dico hercle ego quoque ut *facturus sum*. (*Asin.* 376)

((お前が) どんな風にされるのがよいかを言つてるんだぜ，——わしもどうするつもりでゐるか誓つて言ふとしませう)

(2) scio ut me *dices*. (*Men.* 433)

(お前がおれをどういふだらうかは判つてゐる)

(3) cor dolet, cum scio ut nunc *sum* atque ut *fui*. (*Most.* 149)

(胸が痛くなる，今の俺がどんなか，昔はどうだつたかを思ふと)

(4) iam ego ex hoc, ut *factumst*, scibo. (*Men.* 808)

(さア俺はこの男から，事の次第を知るのだ)

(5) nunc ut mihi te *volo* esse autumo. (*Capt.* 237)

(貴方が私に對してどうあつてほしいかを今お話ししてゐるのです)

(6) ubi istas videas summo genere natas, summatis matronas,/ut amicitiam *colunt* atque ut eam iunctam bene *habent* inter se. (*Cist.* 25—6)

(若しお前さんがあの生れの高い女たちを，やんごとなき刀自たち——あの人たちが何と友情をはぐくんでゐるか，そしてその結合をお互に大事にしてゐるか見たら)

(1)は，對話者が共に dico ut を用ひ，「……だと自分は言つてゐるんだ」と，從屬節の內容が强くなつてゐる。また，(2) (3)は二つながら scio ut であるが，(2)

は，従屬節の動詞が dices といふ直說法未來を示して，話者の自信のほどがあらはされ，(3)では，sum, fui と従屬節の動詞が一人稱であることが注目される。このことは(5)についても言へよう。(4)は scibo の後置が特徴的で，ここも，「事の次第を知らずにはおかぬ」といふ，可成感情的に強い表現である。最後に(6)では，ut の節は rideas の目的に立ちつゝも，既に主文中に目的語群が示されてゐて，ut 以下の遊離性が強いのである。かうしたところから，下のやうな例では，ut はもはや疑問副詞たることをやめて，英語 as に當る接續詞と解したはうがよくなつて來る。[23]

(1) uxor rescivit rem omnem, *ut factum est*, ordine. (*Men.* 679)

(女房は，何もかも，はじめからしまひまで，起つたとほりに知つてしまうたのだ)

(2) omnia, *ut quicque egisti*, ordine scio. (*Pseud.* 1311)

(わしは何もかもいちぶしじふお前がやつたとほりに知つてをる)

(3) verum haud mentior, resque *uti facta* dico. (*Amph.* 573)

(でも，あたしや嘘はつきませんぜ，起つたとほりのことを言つてるんでさア)

(4) ordine omne, *uti quicque actum est*, dum apud hostis sedimus, sdissertavit. (*ib.* 599)

(あたしたちが敵地にゐた間に起つた通り，次々に順序立てゝ何もかも述べたんでさ)

(5) tamen quin loquar haec *uti facta sunt* hic. (*ibid.* 559)

(だがあつしアこのことをここで起つたとほりに言はないでか)

ut 以外の疑問詞の例としては，

(1) indeque spectabam aurum *ubi abstrudebat* senex. (*Aul.* 707)

(其處からわしや黄金を何處に老人が隱してゐるかをみてゐたんだ)

(2) nunc *cuius* iussu *venio* et *quam ob rem venerim*/ dicam. (*Amph.* Prol. 17—8)

(さて，誰の言ひつけでわしがここに來てゐるか，また何のために參つたか申さう)

(3) nunc *quam rem* oratum huc *veni* primum proloquar. (*ib.* 50)

(さて，何事をお願ひにここへ參じたか，先づ語るといたさう)

(4) scio *quid ago.* (*Bacch.* 78)

(あたしや自分が何をしてゐるか辨へてゐるんですから)

(1)は，abstrudebat といふ未完了過去が注目される，この tense は，細江逸記博士の所謂「低徊性の Past[24]」であり，「集注敍述」であつて，話者の意識・關心が其處に「集注」される。ここでは問題の黃金を隱してゐる現場を見た，といふのであるから，當然「焦點」は此處に合はされ，直說法となる。(2)(3)の venio, veni は，現にここに「來てゐる」のであり，(4)は，現に「何をしてゐるか」なのであるから，これも直說法は不自然ではない。(4)の如きは，若し agam では，行爲が未來にわたることになり，文意が變つてしまはう。(2)には venio のほかに，もう一つ venerim といふ接續法完了が用ひられてゐるが，これは，第一に，意識が「自分が現にここに來てゐる」といふ認識から，「何のために來たか」と行爲を振りかへる氣分に移つて，いはば「焦點」がずれたためであり，そのことは，主動詞 dicam との位置的な近接が與つて力となつてゐようし，第二に，Prologus といふものは，本臺辭の對話と違つて，たえず客觀性・冷靜さへの心理的牽引が支配してゐることも考慮さるべきであらう。

なほ，ここでも亦，前述の ut 'how?' → 'as' の移行と同じく，nescio quid の固定表現化が見られ，これは古典期文法においても，後(アト)に直說法の使用を許してゐることは周知の如くである。

nescio pol *quae* illunc hominem *intemperiae tenent.* (*Aul.* 71)

(まつたく何ちふ氣違沙汰にあの人がとつつかれてゐるのか判りやしない)

nescio unde haec hic *spectavit.* (*Amph.* 424)

(どつか知らねえところからこいつ一伍一什を見てやがつた)

何れにしても，ut＋直說法 の場合は，ut 以下が未だ副次性を持たない表現であるために，可成感情的に强い，時には性急な發想に見られる，といつてよいであらう。だから，この形は，實際の臺詞のやりとりにしばしば見えるのであつて，これに反し，たとへば Prologus の如き比較的冷靜な口上には，正則の ut＋接續法があらはれる。

nam ego vos novisse credo iam ut *sit* pater meus etc. (*Amph.* Prol. 104)

（何故と申すに，この私は皆さんが私の父がどんな性質かもうご存じと思ひます）

そして，ut＝'how' の nuance も弱まるのであつて，古典期散文の次の例に見るごとき單なる connective に近い ut への方向を示すといつてよい。

docebat ut omni tempore totius Galliae principatum Aedui *tenuissent*. (Caesar *B. G.* I, 43)

（彼はいつも全ガルリアの主權はアェドゥィーの民が持つてゐた次第を教へた）

このやうな冷靜さ——副次性——へのしるしは，Plautus における ut＋接續法（勿論從屬節の）の用例に必ず見出されるものである。たとへば，

me a portu praemisit domum, ut (1) haec nuntiem uxori suae,/ut (2) *gesserit* rem publicam ductu imperio auspicio suo. (*Amph.* 195—6)

（このわたしを豫め港から家にお寄越しなされたのは，如何にご自分の指揮・命令・烏占權において，お國の大事をお遂げなされたか，それを奥樣に知らせるやうにとのお心）

operam hanc subrupui tibi,/ex me primo ut (1) prima scires, rem ut (2) *gessissem* publicam. (*ib.* 523—4)

（この仕事はそなたのためにこつそりしたこと，如何に國の大事をわしが成し遂げたかを，最初にわしの口からそなたが知るやうにとな）

では，問題の ut (2) 以下を導く主節がすでに ut (1) 以下の目的句である。これと類似のケースは，ut の句が supinum にかかる次の例も同じであらう。

is *speculatum* huc misit me, ut, quae fierent, *fieret* particeps. (*Aul.* 605)

（起らうことが大いに關係のあるお人が何うなるのかを見張りに，彼〔ご主人〕は私をここへ寄越しなすつたのだ）

また，

de argento *si* mater tua sciat ut *sit factum* (*Asin.* 744)

（もしお金のことをお母樣がお知りにならうなら，いつたいそのお金がどうして……）

では sciat が既に條件句中にあるし，[25]

numquam edepol quisquam me exorabit, *quin* tuae uxori rem omnem iam, uti *sit gesta*, eloquar. (*Men.* 518—9)

(あたしが事の次第が何うだつたか一切奥様に喋るなとあたしを說き伏せられる奴ァまつたく神かけて一人もゐますまいよ)

は, eloquar が quin 以下になつてゐる。次に,

rogitant me ut *valeam*, quid *agam*, quid rerum *geram*. (*Aul.* 117)

(わしの氣嫌がどうか, うまくいつてゐるか, 何をしてをるかなどと訊きをる)

priusquam lucet adsunt, *rogitant* noctu ut somnum *ceperim*. (*Mil.* 709)

(夜が明けないうちからやつて來て, 昨夜はよく眠れたかどうかと訊ねてくれます[12])

は共に, 主動詞が疑問を示す rogitare であるため, ut 以下の直接性は弱まるとみてよい。このことは,

quis igitur nisi vos narravit mi, illi ut *fuerit* proelium? (*Amph.* 744)

(だつてあなたをおいて誰方が, そこで戰鬪がどんなだつたかをわたしに話して下さいましたでせう?)

quippe qui ex te audivi, ut urbem maximam/ *expugnavisses* regemque Pterelam tute *occideris*. (*ib.* 745—6)

(だつてあたし, あなたから, どんな風にしてあの大きな都を攻略なすつたか, そしてプテレラス王をご自身でお殺しになつたかうかゞひましたわ)

については言へよう。戰鬪の模樣などといふものは何度聞いても現場にゐなかつた妻に取つては間接的な印象しか與へないのである。

(1) scin ut *dicam?* (*Asin.* 703)

(わたしのいふ意味がお判りですかい?)

(2) pol ego ut te *accusem* merito meditabar. (*Aul.* 550)

(本當に……このわしアあんたに何といつてちやんとした文句を言うてやらうか考へてゐたんだ)

(3) atque id se volt experiri, suom abitum ut *desiderem?* (*Amph.* 662)

(そして, 自分がゐないのをあたしがどんなに淋しがつてゐるか, それを自分で試さうと思つてるのかしら?)

(4) quin me aspice et contempla, ut haec me *deceat*. (*Most.* 172)

(さああたしを眺めてこれがあたしに似合ふかどうかようく見て頂戴)

上の四例では, (1) はおんぶの仕方を相手に判らせようとする條りであつて, rhetorical question ではない。(3) は ut 以下が, 前出の *Capt* 237 同樣一人稱

ではあるが，ここでは rhetorical question でないことは(1)と同じ。(4)では，主動詞に命令法が來てゐるが，ut 以下が話者自身も疑念を示してゐる完全な疑問の節である。戻つて(2)では，ut te accusem merito? といふ deliberative subjunctive が豫想され，接續法は original として無理でなく，しかも accusarem と時の一致を示してゐない所から——それは situation から寧ろ當然だが——accusem の接續法使用は，從屬節ゆゑとは言ひがたい。

從屬節に接續法が來ることは，それだけ敍述の冷靜さを物語るものであつて，たとへば，

iam scis ut *convenerit*. (*Curc*. 435)

(どう話がついたか君はもうご存じだ)

haec scitis iam ut *futura sint*. (*Epid*. 377)

(事がどうならうとしてゐるか，もうお判りでせう)

adulescenti alii narrant ut res *gesta sit*./lenonem abiisse. (*Rud*. 64—5)

(その若者にア他の連中が事がどうなつたかを，女衒の去つちまつたことを，知らせます)

などは，接續法であることによつて押しつけがましさがなく，

sed ea ut *sim implicitus* dicam (*Merc*. 4)

(だがどんな次第でその娘の戀のとりこになつてしまうたかを話さう)

dicam ut hic res *sint* quietae atque hunc ut hinc *amoverim*. (*Most*. 932)

(何うして此處ぢやア事が落着いてゐるか，そして奴をどうして俺が此處にゐないやうにしたかを言つてやらう)

sed ut *sit* de ea re, eloquar. (*Cist*. 565)

(だがそのことについてありやうをお話ししませう)

では，相手に氣を持たす感じ，

animus audire expetit/ ut *gesta* res *sit*. (*Cist*. 554—5)

(事がどうなつたのか，聞きたくつてたまりませんわ)

non vides me ut madide *madeam*? (*Pseud*. 1298)[26]

(ごらんになりませんかい，あつしを。いかにべろんべろんに醉つ拂つてるか)

では，話者の好奇心や，不貞腐れた態度が，それぞれ接續法によつて匂はせられてゐる。また，

at vides me ornatus ut *sim* vestimentis uvidis. (*Rud*. 573)

（だがこのびしよびしよの服を着込んだおれの樣子を見ろよ）

では，vides は殆ど vide に近いものであるが，ここの ut 以下には，びしよ濡れでありたくないといふ——從つて現實の自分の姿が思ひもかけぬ姿であつたといふ——話者の感情が反映して，接續法となるのであらう。

以上いくつかの實例について見たやうに，從屬節における直說法・接續法の混用は決して出鱈目ではなく，それぞれ細かな nuance の相違によつて決定されてゐると言へよう。ここに取り上げてみたことはなにも新しい發見ではない。そのやうなことは到底わたしの學力の及ぶ所でない。これはただ，從來個々に明らかにされてゐることを一つにまとめて，そこにいはゞ焦點を置いて，主として自分のために整理したものにすぎない。

註

1. 齋藤爲三郎譯
2. Gildersleeve § 112, 4
3. 同　上
4. 野上素一「イタリア語入門」 p. 282
5. 何れも主文動詞が否定
6. 泉井久之助譯
7. Lindsay, *Hist. Gram.* IX, § 13
8. *ib* § 12
9. L. R. Palmer : *The Latin Language* p. 74 ff.
10. この場合 velim ut の形は稀である。
11. Palmer, *ib*, p. 328
12. 樋口勝彥譯
13. 田中・村上譯
14. =ut vales?
15. 他に，*Epid.* 19, *Mil.* 1066, 1073, *Pers.* 553, 796, *Rud.* 311
16. *Latin Grammar* § 467
17. 他に同形式のものとして，*Pseud.* 954—5
18. 但し edoceam の讀み方もある。

19. 勿論 ut＋接續法もある, aspice quos submittat humus formosa colores/ ut *veniant* hederae sponte sua melius etc. (Prop. I, ii. 9ff.) (みよ, いかなる色（の花花）をうつくしき土は生ひしむるか, いかに蔦はおのづとあてに生ゆるかを)

20. 樋口譯

21. quae は關係詞とも取れる。

22. 既出

23. 尤も, 何れとも決しがたい場合もある, ibo ad portum atque haec uti sunt facta ero dicam meo. (*Amph.* 460) (1) (2) (4) の例は ordine の竝用が, ut を接續詞と解する方がよいと思はれる一つの根據になるものであるが, 結局は context によるものであらう。尙, *Amph.* 1042, 1129, *Asin.* 731, *Bacch.* 1063 參看。

24. 「動詞時制の研究」IV

25. 類似例. *Capt.* 406—8 (quando の句)

26. p. 11の諸例參看。